

〔論 説〕

日本における市民マラソン大会の動向と今後の展望に関する考察

山 田 耕 生

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

今日、日本では地域活性化の手段としてスポーツを活用するケースが多く地域でみられる¹⁾。例えば、サッカーJリーグやバスケットボールBリーグでは球団を新設する都市が相次いでいるほか、マラソンやウオーキングイベント、自転車のロードレースを開催する地域も増加傾向にある。この背景としては地域活性化の目的のほかにも、国内でのレジャーの多様化や健康志向の高まりとともに、旅先でのスポーツを目的とした旅行、いわゆるスポーツツーリズムが広まりをみせている点がある。スポーツツーリズムとは、Hall (1992)によると「日常生活圏内から離れてスポーツに参加することや、スポーツを観戦するために行われる非商業的な旅行」と定義される。スポーツツーリズムの主な分類として「みるスポーツ」＝観戦型、「するスポーツ」＝参加型、「ささえるスポーツ」＝ボランティア型、がある。このうち、観戦型のスポーツツーリズムではプロ野球やJリーグ、Bリーグ等のプロスポーツの観戦を目的とした旅行のほかにも、全国高校野球選手権大会（いわゆる甲子園大会）の観戦や高校や大学等のサッカー、ラグビー、駅伝などの観戦のために旅行するケースなどがある。参加型のスポーツツーリズムにはマラソンやウオーキング、自転車のイベントのほかにも古くからスキーやゴルフ、マリンスポーツのための旅行が盛んに行われてきた。

これら参加型のスポーツツーリズムのうち、例えばスキーは高度経済成長期に冬季のレジャーとして広まり、その一方でスキー場での就労は農山村地域における冬場の雇用創出にもつながることから東北や新潟県、長野県の積雪地域を中心にスキー場が新設された。その後1980年代から90年代半ばにかけて各地のスキー場では入込客がピークを迎え、スキー場周辺には民宿やペンションなどの宿泊施設も増加し、冬期のレジャーの主流として賑わいを見せた（呉羽 1999）。しかし2000年代に入るとレジャーの多様化と長引く景気低迷により、他のスポーツに比べると居住地からスキー場までの移動や道具等に費用がかかることもありスキー人口が減少していった。そして各地のスキー場でも入込の減少が止まらず、一部では夏場の冷涼な気候を生かしたハイキング、グリーンツーリズムなどの観光を導入して活路を見出した地域もあるが、多くでは閉鎖に追い込まれているのが現状である。

本研究の対象である各地の市民マラソン大会は参加型のスポーツツーリズムとして2000年代に入り開催が増加している。特に2007年から始まった東京マラソンが活況を呈している影響もあり、2010年以降では各地方の中心的な都市において開催されるようになった。本研究ではこの点に着目し、市民マラソン大会開催の動向を整理し、その特徴を

明らかにする。また、各地方の中心的都市のなかで参加ランナーからの評価が高い市民マラソン大会として6事例を取り上げ、開催の特徴や課題を比較考察する。さらに同じ参加型スポーツツーリズムのスキーマの動向を踏まえながら、今後の市民マラソン大会について展望を試みる。

なお、本研究では「市民マラソン大会」の対象として、①参加者を陸上競技連盟登録者に限定せず、広く一般のランナーから参加募集を行い、参加費を集めているマラソン大会、②河川敷や運動公園内、特定の施設の敷地内だけを走るのではなく、一般の公道（国道や市町村道）をコース中の多くの部分で使用しているマラソン大会、③毎年同時期に継続して実施されているマラソン大会、④種目の中にフルマラソン（42.195km）が含まれているマラソン大会を指している。この基準を用いると、2019年時点で市民マラソン大会は全国で116大会²⁾となっている。

1-2 参加型スポーツツーリズムおよび市民マラソン大会に関する研究動向

前述の通り、各地でプロスポーツチームの発足が増加していることやスポーツイベントによる地域活性化への取り組みが増加していることもあり、スポーツツーリズムに関する研究は増加傾向にある。なかでもスポーツツーリズムの定義や類型化を論じた研究は原田（2003）、工藤・野川（2002）、村田（2012）をはじめとして盛んに行われている。また、スポーツツーリズムによる地域活性化への効果や意義を考察した研究としては野川・工藤（1998）、天野（2009）のほか多くの研究がある。そこではスポーツの種目ごとにスポーツツーリズムの動向を明らかにしているほか、事例を用いてスポーツツーリズムと地域への効果や影響を考察している。

本研究の対象である市民マラソン大会に関するものとしては、江頭（2016）は宿泊または日帰りの参加者の立場からの地域への経済効果を分析している。神野・福島（2018）は市民マラソン大会への継続的な参加のための課題を抽出している。また、市民マラソン大会の諸効果については入江（2020）や胡ほか（2020）が経済効果を明らかにしている。その他には大橋（2018）による北海道内のマラソン大会の現状をまとめた研究や、山本（2020）によるマーケティングの観点から市民マラソン大会を考察した研究などがある。本研究ではまだ研究の蓄積が少ない、参加者および開催側（受け入れ組織）の両方の視点を意識しながら考察を進める。さらにマクロ（全国的な動向）およびミクロ（個別の市民マラソン大会事例）の状況を明らかにし、特徴や展望を考察していく。

2. 市民マラソン大会の仕組みについて

本章では市民マラソン大会への参加者と開催側双方の立場から、市民マラソン大会にどのように関わっているかについて整理を行う。

2-1 参加者から市民マラソン大会への関わり

一般的に市民マラソン大会は、例えば2月第2日曜などのように毎年同時期に開催される。そのため、参加を検討する場合はあらかじめどの市民マラソン大会がいつ頃開催されるか事前に把握することが出来る。多くの場合、申込期間は市民マラソン大会の約半年前

から約1か月間の範囲で始まる。申込多数の場合は東京マラソンのように抽選となるケースもあるが、先着順で受付を終了することが多い。また、申込と参加費の支払いが同じタイミングである場合が一般的である。約半年前に参加登録が完了してからは市民マラソン大会直前までは特段参加者側の手続きは生じないが、宿泊を伴う場合は開催地までの交通機関や宿泊施設の手配が必要となる。

市民マラソン当日は、自宅から会場までの距離が日帰り圏で、集合時間まで間に合う場合は、早朝自宅を出て市民マラソン大会会場に向かい、レース終了後に帰宅するというケースが一般的である。開催地が日帰り圏を出て遠距離になる場合、前日に現地入りし、ホテルに1泊して翌朝会場に向かい、レース終了後に帰宅する。

東京マラソン等の参加者数が1万人を超える場合、会場での参加手続き³⁾が前日行うケースもある。その場合は遠方の参加者は必ず会場近くに宿泊することになる。

2-2 開催側から市民マラソン大会への関わり

市民マラソン大会を開催するとなると開催側にとってさまざまな準備すべきことがあるため開催までに1年以上の準備期間を置かなければならない。まず資金集めであるが、地元企業のほか、大手スポーツ用品メーカー、健康、飲食分野などの企業に掛け合い協賛をお願いして資金を得る。また地元行政が主催や後援の場合は行政からの補助金を得ることができる。さらに、レース参加者からの参加費用を徴収することで資金に充てる。

マラソンコースの設定については、開催当日は数時間にわたって公道を使用するため、交通規制をとらなければならない。そのため地元警察からの許可を取る必要があるほか、事前に地元住民にレース開催と交通規制の情報を伝えておく必要もある。さらに、レース時における怪我や事故、体調変化に備えて地元の医療機関との連携も欠かせない。

さらに市民マラソン大会では多くの参加者が長時間、長距離を移動するため、レース当日、コース沿道やスタート・ゴール付近でのかなりの人数の運営スタッフの人手が必要となる。多くの場合は沿道の町内会組織や学校などの協力を得て、コース整理、エイドステーション(給水、給食など)のボランティアスタッフとしてレース中に現場対応をしてもらっているのが現状である。また、地元の陸上連盟、陸上愛好者組織(走友会など)、中学高校大学の陸上競技部の協力を得て沿道整理に当たっている。

そのほか、参加賞や完走メダルなどのグッズの用意や、参加者募集のためのPR(主にインターネットHPなど)、話題を集めるためのゲスト誘致(有名人、名ランナー)や特典(参加者への地元名物料理の提供など)なども企画し、参加者の応募増につなげている。

3. 国内のマラソン大会の動向

本章では2019年時点で毎年開催されている国内のマラソン大会116大会について傾向や特徴を明らかにしていく。

3-1 時系列的な分析による特徴

マラソン大会は公道を利用するため交通規制を敷かなければならないが、できる限り短い時間の規制にとどまることを考慮し、当初は陸連登録者など競技者用に参加を限定して

開催されてきた。また、この時代まではまだフルマラソンを完走する一般ランナーは少なかったと思われる。そのため一般ランナーに門戸を開放した大会は1970年代までではごくわずかであった。

1980年代に入り、レジャーやレクリエーションの大衆化が進み、スポーツを身近なレジャーと捉えて楽しむ機運が広まった。また箱根駅伝や競技マラソン大会のテレビ放映⁴⁾が開始されると、日本選手の活躍もありジョギングを楽しむ人が増加した。その他、バブル景気なども重なり、各地で市民マラソン大会が新設されていった。90年代、2000年代に入っても人々の健康志向など追い風となって一般マラソンの愛好者も増加していき、各地でのマラソン大会は引き続き増加していった。2000年代にはいわゆる「平成の大合併」を記念して新設された市民マラソン大会がいくつかある。また、東京マラソンは2007年に第1回大会が開催されている。

2010年代に入ると東京マラソンでは申込者数が定員を大幅に上回り、抽選倍率も数十倍になるほどの人気となった⁵⁾。また、沿道に多くの応援客や観戦客が集まっている光景がテレビ等で紹介されると地域経済効果も注目され、各地の政令指定都市や中核市といった規模の都市で市民マラソン大会の開催が急増した。この時期に市民マラソン大会が急増したもう一つの背景としては、インターネットの発達がある。これまでは電話やハガキ等での応募に限られたケースも多かったが、ホームページやマラソン情報サイトなどから参加手続きが可能になるなど手間の軽減が参加者増加に大きく関わっている。さらに大会情報もホームページなどによって広まるなど、参加者を集めやすくなった(図1)。

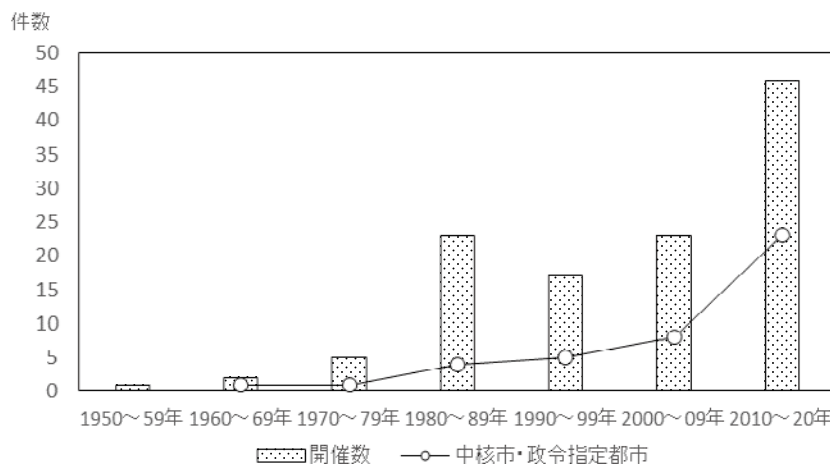


図1 市民マラソン大会の開始年

出所) 筆者作成

3-2 地域・時期の分析及び傾向

月別の開催状況についてみると、10月から翌年4月にかけてマラソン大会が集中している。一般的にマラソンは冬のスポーツであるため、オンシーズンである冬季を中心に開催が多い。地域別では北海道から沖縄県まで各地で開催されているが、地域によって開催時期には大きな違いがみられる。

北海道や東北をはじめ、日本海に面している積雪地域では12月から3月にかけてマラソン大会が開催されることは稀である。しかし関東や近畿など他地域と相対的に冷涼な気候を生かして5月から10月（8月を除く）にかけては最もマラソン大会を多く開催している。

関東や近畿，中国・四国，九州・沖縄では11月，12月，2月，3月にマラソン大会が集中している。同じ地方においては市民マラソン大会の開催日が重ならないように他の大会の動向を見ながら開催するため，これらの月では同じ地方において毎週どこかで市民マラソンが開催されている状況である。なお全国的に島しょ地域，特に島内に周回できるような主要道路があり，マラソンコースの設計に見合う距離や道路幅である場合はマラソン大会を開催しており，現在12島においてフルマラソン大会が開催されている。

近年の注目すべき動向としては，東京や大阪，名古屋など大都市圏の河川敷や大規模運動公園を利用した地域ランニングクラブや民間スポーツイベント企画運営会社などによる市民マラソン大会開催が急増している点である。本研究で対象としたマラソン大会に該当しないため図には表されていないが，これまで開催されていなかった夏季の7月や8月を含め，年数回マラソン大会を開催しているケースも多い。これらのマラソン大会は従来の市民マラソン大会と比べると参加費が安い，参加定員が少ない（数十人から数百人），コースが単調（河川敷や大規模公園の周回コースを利用）といった特徴がある。大都市圏で生活する人々にとり，手軽に参加できるマラソン大会として認知が広まりつつある（図2）。

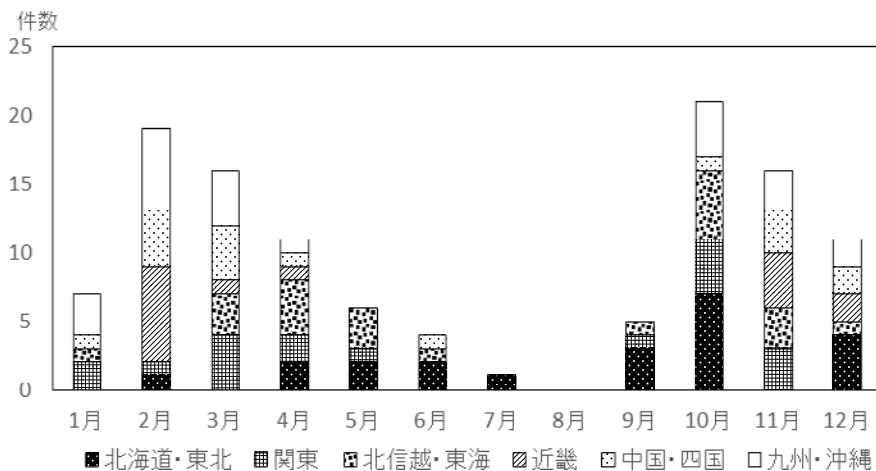


図2 地域別・月別のマラソン大会開催件数

出所) 筆者作成

4. 主催側から見るマラソン大会の特徴

本章では，市民マラソン大会の情報サイト「RUNNET」が実施したマラソン大会参加者の評価が上位の6つのフルマラソン大会について，各大会の開催組織へのヒアリング調査⁶⁾を行い，開催プロセスや実施，運営などを明らかにした。また，6事例を比較しながら特徴や課題の考察を行った。

表1 RUNNET マラソン大会ランキング

	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
1	徳島・海陽究極の清流海部川風流マラソン	徳島・海陽究極の清流海部川風流マラソン	徳島・海陽究極の清流海部川風流マラソン	徳島・海陽究極の清流海部川風流マラソン	徳島・海陽究極の清流海部川風流マラソン
2	愛媛マラソン(愛媛県)	愛媛マラソン(愛媛県)	熊本城マラソン	はが路ふれあいマラソン(栃木県)	大田原マラソン(栃木県)
3	ボストンマラソン	いわきサンシャインマラソン(福島県)	オホーツク網走マラソン	おかやまマラソン	カーター記念黒部名水マラソン(富山県)
4	はが路ふれあいマラソン(栃木県)	さが桜マラソン(佐賀県)	カーター記念黒部名水マラソン(富山県)	カーター記念黒部名水マラソン(富山県)	オホーツク網走マラソン
5	さが桜マラソン(佐賀県)	香住ジオパークフルマラソン(兵庫県)	愛媛マラソン(愛媛県)	愛媛マラソン(愛媛県)	はが路ふれあいマラソン(栃木県)
6	下関海響マラソン(山口県)	世界遺産姫路城マラソン(兵庫県)	長野マラソン	いわきサンシャインマラソン(福島県)	別府大分毎日マラソン(大分県)
7	北九州マラソン(福岡県)	はが路ふれあいマラソン(栃木県)	いわきサンシャインマラソン(福島県)	東京マラソン	愛媛マラソン(愛媛県)
8	柏崎潮風マラソン(新潟県)	長野マラソン	金沢マラソン(石川県)	大田原マラソン(栃木県)	金沢マラソン(石川県)
9	熊本城マラソン	京都マラソン	おかやまマラソン	金沢マラソン(石川県)	熊本城マラソン
10	榛名湖マラソン(群馬県)	北九州マラソン(福岡県)	はが路ふれあいマラソン(栃木県)	熊本城マラソン	長野マラソン

太字は本研究で事例に取り上げた市民マラソン大会
(RUNNET ホームページより作成)

4-1 マラソン大会の開催プロセスと大会規定

4-1-1 函館マラソン

2016年に第1回大会が開催された函館マラソンのルーツは1991年から始まったハーフマラソンである。ハーフマラソンが開催されてから20年が経過した2011年、北海道新幹線開業(2016年)に向けたイベントの一つとして規模を拡大させたフルマラソン化を目標とする「フルマラソン検討委員会」が設置され、もともと行われていたハーフマラソンにフルマラソンを加える形で開催する方向で準備が進められた。現在の函館マラソンは毎年7月第1日曜日に開催され、参加定員はフルマラソン4,000人、ハーフマラソン4,000人の合計8,000人である。以前は毎年9月にハーフマラソンが開催されていたが、マラソンシーズン前の合宿の時期ということもあり、企業に所属するトップレベルの選手は参加していなかった。そこで上位選手の参加による大会自体のレベルアップも考慮しつつ、地元函館地域の経済会とも協議を重ね、7月に開催を決定した。コースは陸上競技場をスタート・ゴールとし、函館市内を巡る市街地型である。フルマラソンのスタート時間は午前9時10分で制限時間は5時間30分となっている。

4-1-2 金沢マラソン

金沢マラソン開催のきっかけは2010年の金沢市長選挙である。当時、スポーツによるまちづくりをマニフェストに掲げた候補者(現市長)が当選し、市長就任を契機に大規模市民マラソン大会が発案された。もともと金沢市で毎年11月第2日曜に金沢市民マラ

表2 各マラソンの概要（2019年）

	函館マラソン	金沢マラソン	世界遺産姫路城マラソン	おかやまマラソン	愛媛マラソン	熊本城マラソン
開催都市	函館市	金沢市	姫路市	岡山市	松山市	熊本市
開催日	7月第1日曜	10月27日(日)： 10月最終日曜日	2月第4日曜	11月10日(日)： 11月第2日曜	2月第2日曜	2月17日(日)： 2月第3日曜
応募時期	2月25日～4月19日(2019年)	4月6日～5月15日(2019)	7月23日～8月21日(2019年)	4月8日～5月18日(2019)	8月5日～8月31日(2019年)	7月29日～9月13日(2019年)
開始年	2016年	第5回(2019年)	2015年	第5回(2019年)	第57回(2019年)	第8回(2019年)
種目	フル、ハーフ	フル	フル、ファンラン(1km～5km)	フル、ファンラン(5.6km)	フル	フル、30km、ファンラン(約3km)
参加定員	フル4,000人、ハーフ4,000人	フル13,000人	フル7,000人、ファンラン4,720人	フル15,000人、ファンラン1,400人	フル10,000人	フル13,000人、30km150人、ファンラン(約3km)1,500人
制限時間	5時間30分	8時40分(7時間)	9時(6時間)	8時45分(6時間)	10時(6時間)	9時(7時間)
コース	陸上競技場をスタート・ゴールとした市街地型	金沢市中心部スタートし、市街地から郊外の陸上競技場をゴールとした混合型	姫路城スタート・ゴールとした郊外型	陸上競技場をスタート・ゴールとした郊外型	松山城付近をスタート・ゴールとした郊外型	熊本市役所前をスタート、熊本城をゴールとした郊外型
主催	北海道陸協、道南陸協、北海道新聞、函館市、函館市教育委員会、函館マラソン大会実行委員会	金沢マラソン組織委員会	姫路市、兵庫陸上競技協会	おかやまマラソン実行委員会	愛媛陸協、南海放送、愛媛新聞、松山市	熊本城マラソン実行委員会/熊本市/熊本日日新聞/熊本陸協
事務局	函館市教育委員会スポーツ振興課	金沢市金沢マラソン推進課	姫路市観光交流局姫路城マラソン推進室	おかやまマラソン実行委員会事務局	南海放送	熊本市イベント推進課

データは2019年度時点のもの。現地でのヒアリング調査より作成

ソンが行われていたものを発展させる形で検討が行われた。開催時期については11月だと寒く、運営スタッフが大変だということで10月最終日曜に決定された。2015年の第1回大会から当初はフルマラソン(参加定員13,000人)のみで開催されてきたが、2020年からは地元市民も気軽に参加しやすくするために1.5kmのファミリーラン(定員300人)も開催することになった。コースは金沢市中心部をスタートし、市街地を走った後に郊外にある陸上競技場のゴールを目指して郊外を走る設計になっている。スタート時間は午前8時40分で、制限時間は7時間となっている。

4-1-3 世界遺産姫路城マラソン

姫路市ではもともと正月に市内の子供を対象とした1～3kmの「姫路城下町マラソン」と競技者を対象とした10マイルの「姫路城ロードレース大会」が実施されていた。2009年から開始された姫路城大天守保存修理事業が2015年に完成するのに合わせ、その記念事業として同年、第1回のフルマラソン大会を実施した。かつてのロードレース大会をフルマラソンに、城下町マラソンはファンランにそれぞれ種目変更して開催されることとなった。日程については、従来行われていた正月から2月第4日曜に移動して毎年同開催

されている。これは、近畿地方、とりわけ姫路市の周辺地域での主要なフルマラソン大会との重複や、競技役員を確保するために兵庫県陸上競技協会が関係する主要大会を避けた結果、同時期の開催となっている。参加定員は、フルマラソン7,000人、ファンラン4,720人の合計11,720人である。定員については、マラソンコースに一部狭小な区間があるため、混雑度や安全性を考慮して決めている。2015年の第1回大会ではフルマラソン定員は6,000人であったが、参加応募者数が多かったため、2017年の第3回大会から7,000人に増員した。コースは市街地にある姫路城前をスタートしたあとは郊外を走り、再びゴールの姫路城に戻ってくる郊外型となっている。スタート時間は午前9時で、制限時間は6時間となっている。

4-1-4 おかやまマラソン

岡山県内には2010年頃までは参加者数1万人を超える大規模市民マラソンが行われていなかった。2011年11月に県知事(当時)と岡山市長(当時)によるトップ会談が開かれた際に、岡山県内に大規模なスポーツイベントを作ろうとの提案があった。さっそく同年、県と市からの職員で構成されたマラソン大会実行委員会が組織され、岡山市でのマラソン大会の検討を開始し、2015年に第1回フルマラソンが開催された。日程については、もともと近隣地域で行われていた総社吉備路マラソン(フルマラソン3,500人を含む参加定員約25,000人)は毎年2月末に開催されるので、その時期を避けるように11月第2日曜に設定された。おかやまマラソンの参加定員はフルマラソン15,000人、ファンラン1,400人である。フルマラソンでは中四国最大規模のマラソン大会にしようという思いが込められている。コースは市街地にある陸上競技場がスタート・ゴールで、スタート後に郊外に抜けて、ゴール近くになると再び市街地に戻ってくる郊外型となっている。スタート時間は午前8時45分で、制限時間は6時間となっている。

4-1-5 愛媛マラソン

松山市では1963年に第1回のフルマラソン大会が開催され、毎年開催されてきた。2009年の第47回大会までは陸連登録者選手のみを対象とした参加人数1,000人以下の大会であった。当時は丘の上にある県総合運動公園を発着するコースで設定されていたため高低差が大きいうえ、制限時間が3時間40分と競技者向けの大会であった。2007年にマラソン検討委員会を設置し、開催規模の拡大に向けて動き出した。そして2010年、第48回愛媛マラソンから陸連登録者以外の一般ランナーも参加可能で時間制限を6時間とした5,000人規模の市民マラソンとしてスタートさせた。日程については観光入込等の閑散期に経済効果を見込んで2月に開催している。同期間の市内のイベントや祭り重ならないように調整して決定している。参加定員は第48回大会の5,000人から段階的に増加させており、現在は10,000人である。コースについては市街地にある松山城前の広場をスタートした後に郊外を走り、再び松山城前のゴールに戻ってくる郊外型となっている。スタート時間は午前10時で制限時間は6時間となっている。

4-1-6 熊本城マラソン

熊本市ではもともと本格的な競技ランナーの陸連登録者を対象とした金栗30キロロー

ドレースが長年開催されてきた。2008年に地元の愛好者団体、熊本県および熊本市レクリエーション協会を中心に熊本市でのシティマラソン開催に向けた検討を開始し、翌年に開催が決定した。約2年間の準備期間を経て、2012年に第1回大会が開催された。開催時期は毎年2月第3曜日で、参加定員はフルマラソン13,000人のほか、ファンラン1,500人、30キロロードレース（陸連登録者）150人の合計14,650人である。コースは市街地にある熊本市役所前をスタートした後に郊外に抜け、その後市街地にあるゴールの熊本城に戻ってくる郊外型となっている。スタート時間は午前9時で制限時間は7時間となっている。

4-2 運営の特徴

4-2-1 主催および共催、事務局

すべての場合において主催者として市が入っている。または市および県からなるマラソン大会のための委員会が組織され主催者になるケースもある。その他、主催または共催には市や周辺地域の陸上競技協会（陸協）が加わり、コース運営のサポートや円滑な大会の進行に向けた現場サポートを行っている。さらに多くの市民ランナーが参加することもあり、マラソン大会当日は地方テレビ局によるテレビ放映が長時間行われるケースも多い。またマラソン大会の結果について地元新聞では多くの紙面を割いて報道することが一般的である。そのため地方テレビ局や地方新聞社が主催や共催として大会に参画することも多い。

事務局としては開催する都市の市役所内のスポーツおよびイベント関連部局が窓口になっているケースが多い。愛媛マラソンでは地元テレビ局が窓口を担当している。

4-2-2 運営スタッフと予算

マラソン大会開催に関する運営資金の管理、PRと参加者募集および手続き、警察や医療機関への協力要請などの大会運営に関する事務局スタッフとしては10~30名が常駐して業務を行っている。一方で、マラソン大会前日や当日の会場運営に関しては数千人のボランティアスタッフが担当しており、会場やコース沿道の整理にあたっている。ボランティアは主に地元の陸上競技連盟がコース沿いでレースの管理を行い、高校や大学の陸上競技部員や沿道の町内会がコースの管理や給水所、給食所で選手へのサポートを行っている。

マラソン大会開催の予算については1億5千万円から4億円まで大会ごとに開きがある。内訳については大会による違いはあるものの、おおむね行政からの補助金、大会参加費、企業からの協賛金がそれぞれ1/3の割合である。

4-3 各大会の特色および課題

4-3-1 各大会の特色

事例に挙げた6大会は参加者からの評価されているポイントについて、運営側へのヒアリング調査に基づいてまとめると以下の通りである。

まずいずれの大会でも沿道からの途切れることない声援を挙げている。実際には自動車専用道路や歩道がなく人の立ち入りが難しい区間もあるので、完全に沿道から途切れなく声援を送ることが不可能である。とはいえ、主に沿道近くの地域住民が協力的でマラソン大会を盛り上げていることがランナーに伝わり、気持ちよく走ることに繋がっていると見える。またコースに設置された給食所における地域特産物の提供も特色として挙げられ

ている。例えばおかやまマラソンではシャインマスカットや白桃、函館マラソンでは海鮮丼といった地域の特産部が提供されることがランナーの楽しみにもつながっている。その他、参加および完走記念のグッズにも特色を出し、ランナーから好評を得ているケースもある。例えば愛媛マラソンでは完走記念に今治タオルを提供している。さらに、姫路城前をスタート・ゴール地点とした世界遺産姫路城マラソンや、ゴール地点が熊本城境内とした熊本城マラソン、金沢城や金沢駅鼓門前を通る金沢マラソンなど、地域の観光資源をコースの要所に配置して特色を出している。

以上のことから、特産物や料理などの食や観光資源といった地域独自の魅力をマラソン大会に結びつけている点、沿道の住民やボランティアスタッフなど地域住民の協力体制が得られている点、高低差を小さくした比較的平坦なコース設計や沿道に設置された km 表示など走りやすさを追求している点、などがランナーにとって魅力に映り、高評価につながり多くの参加者を集めることにつながっているといえる。

4-3-2 各大会の課題

いずれの大会において、課題は大きく2点が挙げられている。まず1つ目は運営スタッフの人材確保である。マラソン大会では一度に多くの参加者に対応し、広範囲にわたってレースが展開されるために多くのボランティアスタッフが必要となる。例えば熊本城マラソンや姫路城マラソン、岡山マラソンでは4,000人以上のボランティアスタッフが沿道の管理やスタート・ゴール時の対応などにあたっている。前述した通り、ボランティアスタッフには地元高校や大学の陸上競技部員、陸上競技連盟、沿道の自治会組織、医療機関など、100以上の組織や団体関わっている。これら多数の組織や団体に毎回参加してもらうための関係づくりが必要であり、ボランティアスタッフを含めた運営スタッフの満足度やモチベーションの維持が課題となっている。また、マラソン大会の運営予算の確保も課題として挙げられている。運営費の1/3を占める民間企業からの協賛金については企業の業績や景気なども左右されるため、なかなか安定的に資金援助が得られるとは限らない。企業側としては地域貢献の意味合いも込めて協賛金を出すわけであるが、マラソン大会が目ざされて多くの参加者を集める魅力ある大会であるかにもかかってくる。そのために前項で示した特色づけをさらに増して多くの企業や組織が協賛する取り組みは重要である。

5. まとめ

本研究で明らかにされたことは以下のとおりである。

①各地の市民マラソン大会の開催状況をみると、1980年代以降に一貫して増加しており、ここ数年では特に地方の中心都市での開催が増加していることが分かった。②地域によって市民マラソン大会の開催時期が異なるものの、同じ地域でも開催数が増加傾向にあることが明らかになった。③東京や大阪、名古屋といった大都市圏では河川敷や大規模運動公園を利用した私設組織による小規模なマラソン大会が急増していることが分かった。④ランナーからの評価が高い6事例をみると、地域の特徴や観光資源を活用しながら独自の魅力をマラソン大会に結びつけているものの、ボランティアスタッフや運営予算の確保といった問題を恒常的に抱えていることが明らかになった。

本研究では対象に含めなかったが、③で述べた大都市圏での私設組織のマラソン大会は急増しており、小規模ながらも大都市住民にとっての身近なマラソン大会参加機会となっている。この傾向が続くようであれば、各地の市民マラソン大会では大都市住民の参加が減少することもありうると予測される。また、市民マラソン大会が一貫して増加傾向にある現状と日本の総人口が減少している状況を合わせて考えると、市民マラソン大会の参加者募集の競争は激しくなると予想され、開催終了を余儀なくされる大会も出てくると思われる。市民マラソン大会の参加者確保や維持に向けては、マラソン大会そのもの内容充実を図るほか、「この町、この都市で走りたい」と思わせるための開催地の観光魅力の向上に向けた取り組みが必要になると言える。

〔注〕

- 1) スポーツによる地域活性化に関する研究として、山田（2009）がある。
- 2) 各大会のホームページ、市民マラソン大会の情報サイトより、2019年度に開催された市民マラソン大会を集計した。
- 3) 参加手続きとしては、例えばゼッケンナンバーや参加記念品の受け渡しなどがある。
- 4) 箱根駅伝は1987年大会から日本テレビによる往路復路の完全生中継が開始された。
- 5) フルマラソン一般参加者の抽選倍率は2013年の第7回大会から10倍を超えている。
- 6) 事例に取り上げた各マラソンのヒアリング調査先と時期は次の通り。函館マラソン（函館マラソン大会実行委員会事務局、2019年12月）、金沢マラソン（金沢マラソン組織委員会事務局、2020年3月）、世界遺産姫路城マラソン（世界遺産姫路城マラソン実行委員会事務局、2019年12月）、おこやまマラソン（おこやまマラソン実行委員会事務局、2020年2月）、愛媛マラソン（愛媛マラソン実行委員会、2019年10月）、熊本城マラソン（2019年11月）

〔参考文献〕

- 山田耕生（2009）プロサッカークラブの本拠地におけるサッカーのまちづくり，共栄大学研究論集7，107・122。
- Hall, C.M. (1992) Adventure, sport and health tourism. In: Weiler, B. and Hall, C.M. (eds.) Special Interest Tourism. Belhaven Press: London, pp 141-158.
- 呉羽正昭（1999）日本におけるスキー場開発の進展と農山村地域の変容，日本生態学会誌49(3), 269-275
- 原田宗彦（2003）スポーツ産業論入門．杏林書房：東京。
- 工藤康宏・野川春夫（2002）スポーツ・ツーリズムにおける研究枠組みに関する研究—“スポーツ”の捉え方に着目して—，順天堂大学スポーツ健康科学研究6, 183-192
- 村田周祐（2012）スポーツ・ツーリズム研究の現代的再構成，体育学研究57(2), 471-482
- 天野宏司（2009）スポーツイベントの創出と観光振興に関する研究—スポニチ佐渡ロングライド210を事例に—，文化情報学16(2), 35-52
- 野川春夫・工藤康宏（1998）スポーツイベントと地域活性化に関する研究—スポーツ・ツー

- リストの観光行動の視点から一, 鹿屋体育大学学術研究紀要 19, 9-19
- 山本智恵子 (2020) スポーツツーリズムイベントの構造分析: 能登和倉万葉の里マラソンのマーケティング戦略, 金沢星稜大学人間科学研究 13(2), 77-84
- 江頭満正 (2016) スポーツツーリストとエクスカージョニストの経済効果比較: 小江戸川越マラソンを事例に, 尚美学園大学総合政策研究紀要 27, 89-105
- 大橋美幸 (2016) マラソン大会と観光に関する研究: 函館ハーフマラソン、奥尻ムーンライトマラソン、大沼グレートラン・ウォークの調査, 函大商学論究 48(2), 61-126
- 神野賢治・福島洋樹 (2018) 大規模市民マラソンへの継続的な参加要因の検討: スポーツツーリズムの推進を視座に, 富山大学人間発達科学部紀要 12(2), 63-74
- 入江雅仁 (2020) 北九州マラソンの経済波及効果, 九州共立大学地域連携推進センター研究紀要 4, 39-49
- 胡威・二宮浩彰・備前嘉文 (2020) 都市型市民マラソン開催による経済波及効果の推計: 奈良マラソンの開催経費からみた費用対効果, スポーツ産業学研究 30(3), 315-323

(2022.1.20 受稿, 2022.3.15 受理)

〔抄 録〕

本研究では市民マラソン大会開催の動向を整理し、その特徴を明らかにした。また各地方の中心的都市のなかで参加ランナーからの評価が高い市民マラソン大会として6事例を取り上げ、開催の特徴や課題を比較考察した。各地の市民マラソン大会の開催状況をみると、1980年代以降に一貫して増加しており、ここ数年では特に地方の中心的な都市での開催が増加していることが分かった。②地域によって市民マラソン大会の開催時期が異なるものの、同じ地域でも開催数が増加傾向にあることが明らかになった。③東京や大阪、名古屋といった大都市圏では河川敷や大規模運動公園を利用した私設組織による小規模なマラソン大会が急増していることが分かった。④ランナーからの評価が高い6事例をみると、地域の特徴や観光資源を活用しながら独自の魅力をマラソン大会に結びつけているものの、ボランティアスタッフや運営予算の確保といった問題を恒常的に抱えていることが明らかになった。